

氏 名	三宅正浩
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第430号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科歴史文化学専攻
学位論文題目	近世大名家の政治秩序

論文調査委員 (主査) 教授 藤井讓治 教授 勝山清次 准教授 吉川真司

論文内容の要旨

本論文は、近世の政治秩序の解明に向けて、外様国持大名である蜂須賀家を考察対象とし、大名家の視点からの近世政治秩序の構造・歴史的段階について論じたものである。ここでいう近世政治秩序とは、近世の政治のあり方における人々の意識や志向性等、政治構造を規定する規則性を指す。

近世大名家（藩）をめぐる研究については、1950年代以降、藩政（制）成立史研究・藩政改革研究が盛んに行われ、多くの成果が蓄積されたが、その後諸分野における研究の深化とともに藩研究は停滞したとされている。これに対して近年、「藩」を軸とした新たな概念提起がなされている。「尾張藩社会」や「藩世界」といったそれらの概念は、狭義の藩概念（藩政機構）に地域社会や領民まで含み込んで総合化しようとする試みである。しかしながら、あくまでも政治権力体である「藩」を軸として総合化を試みるのであれば、まずはその総合化の核となるべき狭義の藩＝藩政機構、さらにいえばその機構を構成する武家集団＝大名家の構造・性格を追求する必要がある。近年の一次史料を利用した動態的な政治史研究の中では、大名家・藩政研究はその個別多様性もあって全体的見通しを得るに至っておらず、幕府・幕政研究に比して立ち後れている。本論文は、こうした問題意識にたち、近世大名家の政治秩序を考察したものである。

事例として取り上げた蜂須賀家は、豊臣取立大名にその出自を求めることができ、近世においては阿波・淡路両国25万石余を領した。こうした蜂須賀家という個別大名家の特質に留意し、近世大名家という政治権力体が如何なる過程を経て形成され、その過程で如何なる原理を有することになったのかを考察したのが本論文である。全7章と3補論から成り、2部構成としている。第Ⅰ部が具体的に蜂須賀家の政治秩序とその歴史的展開を考察したものであり、第Ⅱ部は第Ⅰ部の前提として、分析に使用した史料（蜂須賀家文書）の史料論的考察を行ったものである。

序章「近世大名家研究の課題と方法」では、藩をめぐる前述した研究状況について、戦後から近年に至るまでの研究史を整理し、本論文の視点と課題を述べている。

第Ⅰ部「近世大名蜂須賀家の研究」では、近世前期における近世大名家の政治秩序の成立過程に注目し、さらに、中後期の藩政改革の際の歴史認識の視点から近世大名家の政治秩序の展開を捉え直す。近世前期と中期の分析を同事例において一貫した視点で行い、個別事例に注目しながらもその時系列的・空間的広がりにも留意している。

第一章「近世大名家の「家中」形成と証人制」では、藩主を頂点として編成された近世的な大名家の「家中」形成過程を、将軍（幕府）―大名（藩）―家老の三者関係の中で考察する。近世初期に存在した証人制は、幕府がその大名家（武家集団）全体を統制するとともに、大名による「家中」編成、すなわち家老の「御家」への包摂を促進する性格を合わせもっていた。寛文5年（1665）に証人制が廃止されたことは、大名家における「御家」「家中」の確立を象徴的に示すといえる。証人制等を通して将軍（幕府）と直接繋がる存在であった大名家の大身家臣は、前述の三者関係の中で大名「御家」に包摂され「家中」に編成された。主君権威化という方向性でなされたそうした過程が、近世大名家における特別な地位を家老に与えたことも指摘する。

第二章「近世初期大名家隠居政治考―蜂須賀蓬庵の場合―」では、近世初期特有の政治形態である隠居政治を取り上げる。蓬庵による隠居政治は、隠居の幕藩領主世界における位置を背景に、公儀（幕府）や他大名との関係を保ちながら幕藩関係の安定化につとめ、公儀の存在を背景として家中の意識改革を行い、当主忠英中心の家中一体化を図ったものであった。蓬庵隠居政治は、寛永後期から寛文期にかけての「家中」成立、藩政機構整備、幕藩関係安定化の前提を用意するものであったと位置づける。

第三章「寛永期大名家の政治課題―島原の乱・寛永飢饉と蜂須賀家―」では、寛永期に幕藩領主が直面した二つの危機（島原の乱・寛永飢饉）への対応の中で、大名家が如何なる政治課題に直面したのかを考察する。島原の乱を一つの契機として定着しつつあった家老合議のあり方は、公儀（将軍家光）がキリシタン改め強化・奢侈統制というその志向性を大名家にまで押し及ぼそうとする動きの中で、より重要性を増した。大名家内部で完結しえない、公儀の意向をふまえた政策であったことから、藩主の意を受けた家老が合議して事にあたることになったのである。こうした家老合議の政治構造は、寛永飢饉を背景として仕置家老制の導入へと至る。寛永末年の凶作状況は、困窮しつつあった家中の成立、さらには領国を含めた大名家全体の成立に向けた領国支配機構の整備を促し、その中で、家中・領国の仕置を担う仕置家老が惣家老の中から一名任命される仕置家老制が導入されたのである。

第四章「寛文期大名家の政治構造―江戸と国許―」では、幕藩制の確立期とされる寛文期を対象として、藩政機構がどのような政治構造として確立したのかを考察する。寛永期に導入された仕置家老制は、寛文期に至り、家老仕置の政治構造として制度的な確立をみる。三代光隆期には、藩政の最高意思決定者である藩主が、参勤交代によって江戸と国許を移動するというあり方を前提として、家老中心の政治構造が制度的に確立した。地方支配や公事裁許等の制度が整備されていく中で、藩主が参府した留守中の最高責任者として仕置家老が明確に位置づけられ、藩主が自らの最高意思決定権を保持しつつも、家老中心の藩政機構が形成されることとなったのである。大名家における寛文期という時期は、藩主「親政」とでもいうべきあり方が顕著に見られる時期である。藩主「直仕置」の名のもとに藩政機構の制度的な確立が進み、藩政機構の中心たる家老の位置が確定したのがこの時期である。

補論一「寛文期の蜂須賀家京都留守居―御用状にみるその役割―」では、寛文期における蜂須賀家の京都留守居の役割の一端を、当時江戸や国許との間でやり取りされた御用状の内容から紹介した。寛文期の京都留守居は、女奉公人の雇用・進物等の調達・借銀等といった役割を果たしていた。

第五章「近世前期蜂須賀家と親類大名井伊直孝―幕藩関係における役割を中心に―」では、蜂須賀家の親類大名であった井伊直孝の役割を分析し、慶長期から寛文期に至る幕藩関係の展開の一端を考察する。蓬庵の婿である井伊直孝は、蜂須賀家の家中統制に発言力を持つと共に、蜂須賀家の対幕府交渉においてその幕府内での立場もあって指南的な役割を果たしていた。蜂須賀家にとっての井伊直孝のような、外様国持大名の指南的役割を果たしていた親類譜代大名は、外様大名が何かと幕府の意向を気にしすぎる傾向に対してそれを嗜める傾向にあった。彼らを媒介として幕藩関係のあり方が見直され、安定化が図られていたといえる。

第六章「藩政改革の政治構造―藩政史認識形成の視点から―」では、近世中後期の政治改革が、まず第一に儉約・風儀統制政策として行われたことの意味、そこから見える近世政治秩序の特質を、「藩政史認識」という歴史認識の視点を導入して論じる。近世中期における藩財政窮乏、一揆・騒動の頻発という状況は、宝暦期頃の徳島藩においては、家中・領内における作法・風俗の乱れが根本的原因であると捉えられ、儉約政策・風儀統制政策が打ち出された。その中で、その乱れを糺すための「正しい」先例が調査されるようになった。結果、藩政の変遷を①初代至鎮から三代光隆までの「御手仕置」の時期、②三代光隆期の一部と四代綱通期を合わせた「御手仕置之格相」の時期、③それ以降の「御家老御仕置」の時期、という三段階の時期区分で認識する藩政史認識が成立し、定着した。そして寛政期には、②の時期、すなわち寛文期を藩政「復帰」の対象時期として、藩主治昭主導による藩政改革が行われ、藩主「直仕置」と「家老仕置」の両立が図られたのである。

第Ⅱ部「蜂須賀家文書の研究」では、第Ⅰ部での研究の前提となる、使用する史料群の史料論的考察を行う。本稿で主に使用した史料は、国文学研究資料館が所蔵する阿波国徳島蜂須賀家文書である。

第七章「蜂須賀家文書「草案」の構成と伝来」では、蜂須賀家文書に存在する「草案」と呼ばれる歴代藩主書状留の史料

論的考察を行う。蜂須賀家文書「草案」の史料性格と共に、天保期の史料整理事業についても分析を加える。蜂須賀家においては、初代～三代までの史料が依るべき先例として重視されて整理・保管され、天保期の整理事業の際には、保管に混乱が生じていた「草案」の整理・謄写・年代比定が行われた。そしてその際に形成された包紙・貼紙などの原状が、現在にまで引き継がれた。こうした事実をふまえ、さらに「草案」全点の年代比定作業を行ったのが本章である。「草案」は、近世前期の政治動向や大名の交際を知る上で有益かつ重要な史料である。

補論二「蜂須賀家文書「江戸仕置所史料」について」では、第七章と同様の視点から、寛文期に江戸藩邸において作成されたと考えられる記録群である「江戸仕置所史料」を蜂須賀家文書全体の中から抽出し、その構成と史料性格を明らかにした。

補論三「『秋長』書状の年代比定をめぐる一関ヶ原合戦と蜂須賀家政」では、蜂須賀家文書に伝来した「秋長」という署名のある書状について考察する。「秋長」書状が、従来いわれてきたように秀吉による四国出兵の際のものではなく、関ヶ原合戦直後のものであることを周辺状況と共に示し、特に近世前期以前の史料解釈における年代比定の重要性を提起したものである。

最後に、結語「近世大名家の政治秩序—その歴史的諸段階—」において、2部7章3補論の考察を通して得た成果をまとめ、今後近世政治史研究・藩研究を進展させてより全体的な議論へと高める見通しを得るための若干の展望を記す。近世大名家の政治秩序は、幕府・幕政と密接に関連しており、幕政や他大名家の藩政との相互関係性、大名家の政治構造における江戸一國許関係に規定されている。そうした特質の結節点となるのが藩主一家老レベルでの政治構造のあり方であり、ここに、藩主一家老レベルでの政治構造分析から近世大名家の政治秩序に迫った本稿の意義がある。藩主一家老レベルでの本論文の成果の上にたち、その政治構造が、家中・領国支配において実際に発現する諸政策をどう規定し、それに家中・領国がどう反応したのかを考察することが、大名家の視点からの近世幕藩制国家の政治秩序の全体像を見通す一つの有効な方法となるであろうとする。

論文審査の結果の要旨

本論文は、外様国持大名である蜂須賀家を素材に、大名家の視点から近世幕藩制国家の政治秩序を解明しようとしたものである。全体は2部7章に分かれたり、序章と結語が配されている。序章では、研究史を総括し、課題を提示する。第Ⅰ部を構成する6章が本論文の中核的部分で、第Ⅱ部は、素材とする蜂須賀家文書の史料論的考察であり、1つの章と2つの補論からなる。

近世大名家・藩をめぐる研究は、1950年代から70年代はじめにかけ、社会経済史研究の進展を背景としながら、農政史研究・藩制研究・家臣団研究等で多くの研究が蓄積され、さらに藩政史のもつ個性性を克服するため比較藩政史や幕藩関係史の試みがなされた。70年代後半に入ると、国家史への関心の高まるなか、藩政史・大名研究は停滞をみせる。それに対し、近年、「藩社会」「藩世界」など新たな概念を提起し、狭義の藩に地域社会や領民までを含み込んで総合化しようとする試みが始まっている。こうした動向のなかで、論者は、まずその核となる武家集団＝大名家の構造・性格を追求することの必要性を強調する。

第一章では、藩主を頂点として編成された近世的な大名家の「家中」形成過程を、将軍（幕府）—大名（藩）—家老の三者の関係に焦点をあて考察し、家老子息等を幕府へと差し出す証人制は、幕府がその大名家全体を統制するとともに、大名による「家中」編成、すなわち家老の「御家」への包摂を促進する性格を合わせもっていた点を明らかにする。証人制の具体像を描いた研究として評価される。

第二章では、近世初期特有の政治形態である隠居政治を取り上げ、隠居政治が、公儀（幕府）や他大名との関係を保ちながら幕藩関係の安定化をはかり、かつ公儀の存在を背景として家中の意識改革を行い、当主中心の家中一体化を図るものであったと論じる。第三章では、寛永期に幕藩領主が直面した二つの危機、島原の乱と寛永飢饉への徳島藩の対応を取り上げ、幕府政策の藩への浸透が強化されるなか、定着しつつあった家老合議の重要性が増大し、さらに飢饉への対応として領内支配機構が整備され、家中・領国の仕置を担う仕置家老制が導入されたことを明らかにする。

そして第四章で、幕藩制の確立期とされる寛文期に、地方支配や公事裁許制度のいっそうの整備を背景に、藩主による

「直仕置」を前提としたうえで、藩主が参府した留守中の最高責任者として仕置家老が明確に位置づけられ、そこに江戸と国許という藩政の制度的な確立がなされたと主張する。第五章では、蜂須賀蓬庵の婿である譜代大名井伊直孝が親類大名として蜂須賀家の家中統制に発言力を持つとともに、蜂須賀家の対幕府交渉において指南的な役割を果たしていたことを明らかにする。

第六章では、近世中後期における藩財政窮乏、一揆・騒動の頻発を家中・領内における作法・風俗の乱れが根本的原因であるとし、それを克服するために自らの歴史を跡づけることで「藩政史認識」を作りだし、寛文期の「御手仕置之格相」を「復帰」の拠りどころとすることで藩政改革が推し進められた点を明らかにし、そこにこの時期の政治秩序の特質を捉えている。

第Ⅱ部「蜂須賀家文書の研究」は、第Ⅰ部の分析の前提となる大名文書である蜂須賀家文書の史料論的考察であり、第七章では、近世後期の藩による史料整理事業をとりあげ、蜂須賀家においては初代～三代までの史料を重視した整理・保管がなされたこと、天保期の整理事業においてそれまで混乱が生じていた藩主の書状留である「草案」の整理・謄写・年代比定がなされたこと、そしてその時の原状が現在にまで引き継がれていることを明らかにし、さらに、天保段階では年代比定がなされず一括されていた「草案」の断簡を含めて全点の年代比定を行い、それを確定している。

以上述べてきたように、本論文は、外様国持大名蜂須賀家を、将軍—大名—家老の三者の関係に焦点をあて分析することで、近世前期における大名家の政治秩序がいかに形成されたかを、またそれが近世後期の藩政改革の依るべき姿として浮上する過程を「藩政史意識」の形成を軸に明らかにした点は、大きな成果といえる。さらに、蜂須賀家文書の史料論的分析は、近年の大名史料論を深めた点で評価できる。しかし、大名家の政治秩序の形成と近世後期でのその利用を主張するとき、その間にあたる17世紀後半から18世紀中期までの政治秩序が検討されていない点は物足りなさが残る。また、政治秩序の形成を考察する場合、将軍—大名—家老の関係に限定せず、もう少し広がりを持った考察が求められよう。だが、こうした点は、論者の今後の努力によって克服されるべきものであり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年2月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。